

米寿を迎えて家族と共に歩んだ道

令和6年(2024)7月19日

2) 5日

3) 私は、昭和12年にこの世に生を受け、米寿を迎える事が出来た。今日までの長い年月を振り返ると、数々の思い出が蘇る。現職の頃は仕事に追われる日々で、家族や職場の仲間と共に過ごした時間は、今でも鮮明に覚えている。妻とは60年の長い年月を共にし、今日、妻と二人で静かな日々を過ごしている。妻とは共に多くの喜びと困難を乗り越えてきたが、一昨年、妻が家の中で転倒し、腰を打撲してしまった時は、私たちにとって大きな試練であった。しかし、妻は通院を続け、今では週に一度のデイサービスで機能回復に努めており、平常な日常生活が出来るようになった。彼女の精神力と身体の回復力には感心させられた。

妻が動けなくなった時には、長男が手続き関係一切をやってくれたし、長女も東京から数回駆け付けてくれたり、LINEで情報交換をしてくれた。家族の支えがあったからこそ、乗り越える事が出来た。

私も75歳の時に心臓の大動脈弁取り換え手術を受け、7年前には大動脈解離の病にかかりました。その際には家族に大変お世話になり、今日、老化は進み体力はなくなりましたが、認知予防に毎週川柳を中央新聞の地方欄に投稿し、掲載される楽しみを持っている。また、週一の日誌を書き、webで発信するなど、自由気ままに好きな事に取り組んでいる日常生活を送っている。

私たちには二人の子供がいる。長男は56歳で家庭を持ち、3人の娘を育てており、上の二人の孫娘はすでに就職し、それぞれの道を歩んでいる。長女は53歳で、東京で独り身の生活を続けている。彼女は結婚せず、自分の道をしっかりと歩んでいる姿に、親として誇りに感じている。

この度、私が米寿を迎えるにあたり、長女が長男に声を掛けてくれて、13日に私の米寿祝いを我が家で親子4人で行う事になった。長男には家族でお祝いに来るようと娘が連絡したが、残念ながら長男家族は来ないとの事、それでも、妻と子供二人で私の米寿祝いをしてくれる事に感謝している。

私の人生は、家族と共に歩んできた道のりで、喜びも悲しみも、全てが私の一部となり、今の私を形作っている。これからも、家族との絆を大切にしながら、穏やかな日々を過ごしていきたいと思っている。

4) 玉城徳丸が作詞し、里見更が作曲「米寿祝の歌」は八十八年という長い年月を生き抜いて、人生の歩みを讃え、その喜びと感謝の気持ちを歌詞に込めて歌っています。聞いてみましょう。

5) 今日の一句

6) 日々気になる出来事でした。